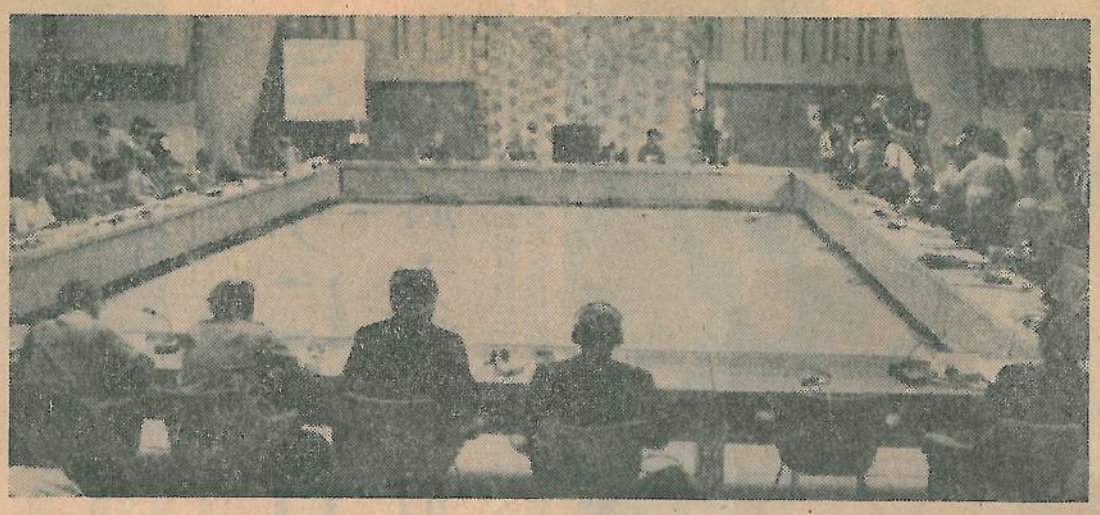
©2022 YHAL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所　湯川記念館史料室

毎日新聞（夕刊）　昭和50年（1975年）8月28日（木曜日）

1975.8.28
毎日夕刊

被爆国日本で初めて開かれた第25回パグウォッシュ京都会議（28日午前9時40分）



核軍縮、世界の良心に訴え

パグウォッシュ会議開く

湯川博士ら静かに

【京都】世界の著名な科学者、政治、経済学者などが完全核軍縮、平和への道を探求する第二十五回パグウォッシュ・シンポジウム（京都シンポジウム）が二十八日午前九時半、京都市左京区宝池の国立京都国際会館で開幕した。日本では初の開催で、参加者は日本側十一人、外国から十六カ国、二国際団体二十五人の計三十六人。「完全核軍縮への新しい構想」を主題に五日間の討論に入った。三カ月近い入院生活と闘いながら開会のあいさつに立った湯川秀樹博士（ぶ）は悲壮な表情で〝核兵器〟と闘う科学者の決意を述べた。つづいてシンポジウム直前、病気で倒れたB・フェルト・パグウォッシュ本部事務局長に代わってJ・ロートブラット・ロンドン大教授が開会を宣言した。

（6面に関連記事）

午前九時過ぎ、宿舎の京都ホテルから会場に着いた参加者たちは、開会を待ち兼ねるように言葉を交わしながら、それぞれのテーブルに着いた。

シンポジウムは連日午前九時半から午後五時（三十一日は午前零時半）まで核兵器絶滅の道を探るための①近代科学および技術の諸分野において、特に大量破壊兵器の応用に関係して提起された諸問題、倫理原則が含まれる②近代兵器および兵器体系の世界の問題におよぼす諸影響、核エネルギーテクノロジー、平和目的の核爆発などから引き起こされつつある核拡散の問題③核軍縮への第一歩、たとえば核不使用条約④完全核軍縮への諸段階と日程――の四議題について世界的視野から討論を深める。また、この間〝幻のフィルム〟といわれ、昨年米国から返還された広島、長崎の被爆直後を写したカラー映画を全員で見る。

会議は慣例から非公開。二十九日からは毎夕記者会見で会議の要旨を発表する。

また、会議を終えた九月二、三日には京都と東京で公開記念講演会（無料）も開く。

【二日】午後六時、京都市下京区四条烏丸町、山一証券ホール、テーマ「全面核軍縮を目指して」朝永振一郎氏「第二十五回パグウォッシュ・シンポジウムの日本開催をめぐって」▽ロートブラット・ロンドン大教授（物理学）「ラッセル・アインシュタイン宣言の今日的意味」▽エプシュタイン・国連教育研究所特別研究員（カナダ）「核危機を打開するには」

【三日】午後五時半、東京千代田区、千代田公会堂。テーマは同じ。朝永振一郎氏「同」▽モーレ・コペンハーゲン大教授（分子生物学）テーマ未定▽ヨーク・カリフォルニア大教授（物理学）同未定。

パグウォッシュ参加者（敬称略）

【国外】▽P・ブラウ（オーストリア・経済）▽W・エプシュタイン（カナダ・軍縮）▽J・カムスコム（カメルーン）▽O・モーレ（デンマーク・分子生物学）▽M・マホーズ（エジプト）▽E・E・ガラール（エジプト・薬理）▽J・モック（フランス・軍備）▽D・ゼンハース（西独・政治学）▽H・クレーガー（東独・国際法）▽K・スプラマニアム（インド・安全保障問題）▽H・A・トルホク（オランダ・物理）▽S・E・オコイエ（ナイジェリア・物理）▽H・オルセン（ノルウェー・物理）▽F・ヤノホ（スウェーデン・物理）▽J・ロートブラット（英・物理）▽R・A・フォーク（米・政治）▽W・C・ダビドン（米・物理）▽G・H・ラシエンス（米・政治学）▽H・ヨーク（米・物理）▽V・S・エメリアノフ（ソ連・工学）▽V・クレショフ（ソ連）▽M・A・マルコフ（ソ連・物理）▽V・P・パブリチェンコ（ソ連・軍備管理）▽K・ツィビス（国際平和問題研究所・物理）▽M・カプラン（WHO・微生物）

【国内】▽飯島宗一（広大学長・病理）▽野上茂吉郎（法大教授・物理）▽小川岩雄（立教大教授・同）▽朝永振一郎（東京教大名誉教授・同）▽豊田利幸（名大教授・同）▽山田英二（金沢大教授・同）▽湯川秀樹（京大名誉教授・同）▽坂本義和（東大教授・国際政治）▽関寛治（同・同）▽西川潤（早大助教授・経済）▽渡部経彦（阪大教授・同）

共通の敵、核兵器

湯川博士あいさつ

私は今年五月から病に倒れ、病院におりました。六月と七月に二度手術を受けました。病気と手術の後遺症のため体力が衰えており、シンポジウムの討論に参加することができません。しかし、私は日本のパグウォッシュグループを代表して海外からのわれわれの友人に歓迎の言葉を述べることが義務と思ってきました。

今回のシンポジウムは限られた参加者でスケールも小さいのですが、われわれはシンポジウムを有意義なものにできると信じています。それを成し得るために、私たちはまず二十年前のラッセル・アインシュタイン宣言の精神に戻るべきであると思います。その宣言は人類の生存を望む科学者によって叫ばれた国際会議だったことで画期的なことです。またラッセル・アインシュタイン宣言は、この地上からすべての戦争を否定し、核兵器の絶滅を目的としたという点で画期的でした。

なぜなら、当時いかなる戦争も核戦争に発展し、人類の絶滅につながる危険性があったからです。

開会式であいさつする湯川秀樹博士（28日午前9時40分）

その宣言に呼応し多くのパグウォッシュ会議とシンポジウムが一九五七年以来開かれています。にもかかわらず、われわれは会議本来の目的を達しておらず、むしろ目的に到達しなかったことを残念に思います。これは核軍備競争を阻止し得なかったことに起因しています。特に超二大核保有国は過去二十年間、絶えずその核軍備を質量ともに増大してきました。この垂直増殖（拡散）傾向は今日まで続いています。

われわれは核兵器の水平的拡散を心配せねばならなくなりました。核拡散防止条約が多くの国によって調印され、またそれを批准する国が増えていることも事実です。その条約の不合理さにもかかわらず、多くの非核保有国がその条約に調印し、批准した背景には、そうすることによって彼らが核保有国に対する核軍縮へのてことなることを希望し、期待したからです。

核軍縮への道を妨げている一つの要因は、核抑止の概念です。これについては多様な議論がなされておりますが、核抑止概念に基づいた政策は、常に積極的な強い反動に苦しんでおります。この強い反動というのは、超大国の核軍備がその無限性を指向しているからです。このことは完全軍縮への道にまさに逆行するものであり、核軍縮を達成する方法は、ゼロを目指して、繰り返し核軍縮への努力を続ける、その過程によってのみ、開かれるのです。

次に非常に重要なのは、非核保有国の安全の問題です。現在、われわれが最低限期待できるのは核保有国が非保有国に対して核を絶対に使用しない、あるいは核兵器による威かくは行わないという約束を、すべての核保有国にさせることです。このような約束を取りつけることは、核兵器の水平的増殖（拡散）を防止するためにも役立ち得ます。

科学者及び技術者の社会的機能、倫理という問題もこのシンポジウムの主なテーマです。私は討論に出席しない代わりに、人類の将来についての個人的な見解を述べさせていただきます。人類の生存にとって核軍縮の達成は必要ですが、それはわれわれがなさねばならないものの一部分に過ぎないこともまた明らかです。なさねばならないものは一般兵器の核を含めた完全軍縮を達成するための不可欠の要素です。完全軍縮によってわれわれの目的が終わったというものでもありません。究極の目的はすべての国々の安全が軍備なしに保障される世界体系をつくりあげることにあります。この点において私は世界連邦構想をラッセル、アインシュタイン両博士の考えと同じくするものです。

私はここに会するすべての人々が核軍縮を達成する必要性に同意されるものと信じます。また核兵器はわれわれの共通の敵であり、その地上からの廃絶こそ目的であるということに、同意されるものと信じて疑いません。